



はしがき

すすめにより、父、恂臧の伝記を発端として、この私の略伝にたえるものを「福祉のひろば」(編集) 総合社会福祉研究所)の二〇一一年四月から二〇一四年五月の掲載にある。 「光りなき者とともに」と題する一書を出だす。もともとは「福祉のひろば」の黒田孝彦編集主幹の

当たられた千田光郎氏から、父への「思い出」と題する四○○字詰の原稿用紙三冊分の原稿を父の死後、 聴講して以来、父の浪速少年院就任以後、父と少年院教官として勤務され、その後も長く少年院教育に 一九七六年に執筆されて、私に託されたものを読者の便宜上、これと父・第一部に続く第二部とし、私 今、これをまとめて一冊とするに当たり、父に千葉高等園芸学校の入学、同校での父の倫理学講義等

デモクラシー熱のこもった有機的、組織的、人間的な非行少年教育が始まった。 た。父に浪速を任されたが、父の思う様にしていいという一札で、父の精魂を傾けての我国最初の大正 第一部、第二部は、戦前一九二三年の少年法、矯正院法により、多摩・浪速二つの少年院が設けられ

に関する部分を第三部とした。

父の口癖は、「少年院は司法省の下にはあるが、刑務所いわんや旧時の監獄などでは断じてない」で

恂臧・政亮ともに略年譜を付けた。他に政亮には、「私が関わった社会保障裁判」の一覧表を付した。

<u>はしがき</u> 1

氏は故人とならんに千田光郎氏と記事の印刷を快く許された氏の御遺族に感謝したい。 部の情景、官舎の私たちの生活、家と家とが昨日の事のように眼前に髣髴とするのを覚える。記して、第二部を読むと、当時の少年院の風物・院生や教職員諸氏の行動、殊に千田氏が力を入れられた園芸

厚く感謝の意を表したい。(二〇一四年一二月一一日) 終わりに、本書が成るについて、五年に亘り、本書のためのエネルギーを注いで頂いた黒田孝彦氏に

―恂臧・政亮 父子二代の記― 光りなき者とともに

第1部 父・恂臧(じゅんぞう)

父・恂臧さんのプロフィール 17

信は力なり――感化院教諭、そして少年院院長に―――――

武蔵野学院時代————

浪速少年院をたち上げる――――

25

浪速少年院時代―春風秋霜――――

29

浪速少年院時代―別れ――――

33

またまた騒擾

33

英文要覧 *34*

浪速少年院生奉仕の新設府道通り初め 35

二つの別れ 36

多摩少年院を改革―――――38

荒れた多摩少年院 38

改革に着手 39

職業教育·情操教育·軍事教育 40

人間の本来の姿を追求 41

七顛八起

生徒製作生産品展覧即売会 3

柳と石蛙、一少年の命を救う 44

いろんな意味での始まり――――――

心理学・精神医学の研究をも踏まえて 47

芸術的視野(バックグラウンド)から 48

武蔵野学院生らに祝福されて――私の誕生 50

小川恂臧さんから何を考えるか--臨床心理学の立場から(横湯園子)

52

鬼)哀風長つハミつの 3「あの時代に、このような教育が可能であったのだ……」の驚き

魂の原風景のいくつかい。

法と教育の「間」にあって求めたもの――精神医学と心理学

(座談会) 小川恂臧さんは何を残したか 小川政亮・横湯園子・永岡正己

浪速・多摩少年院院長を歴任 9

社会事業の本流から非行少年教育への

浪速少年院時代--徹底的に少年に寄り添って 63

「春風を以て人に接せよ」 68

文化を通して人格発達を

家庭人としての小川恂臧

69

小川恂臧から何を学ぶか 70

第2部 小川恂臧先生の思い出

思い出(1)

千葉高等園芸学校時代 74

小川先生との出会い 76

小川先生を送る 89

公けな送別会

学校の外での小川先生 92

91

淡水会

武蔵野学院時代の小川恂臧先生と私

浪速少年院仮事務所

109

千田光郎 73

思い出(2) 浪速少年院初代院長 小川恂臧先生

小川先生の御発病 113

109

101

145

家畜、家禽、養蜂 150

果樹園 148 148

蔬菜園

花卉、蔬菜、果樹、

庭 園

農場は道場 公道構築寄贈

141

140

浪速少年院教職員

127

浪速少年院

116

思い出(3)

浪速少年院と行事 153 153

講演会、学芸会、そして音楽会 154

創立記念日 157

精霊祭と地蔵盆 158

プール開き 161 159

遠足と登山

軍事教練と発火演習

162

少年院展

日曜学校とクリスマス

日輪草 165

石棺の蓋 出土品 暴動 逃走 婦人会と甲子上太郎会 愛嬢の夭折 日本初の理学博士 伊藤圭介 私人としての小川恂臧先生 千田光郎叱られる あとがき お地蔵さん 小川院長先生を多摩に送る 172 167 168 200 171 203 177 201 198 190

196

第 3 部 政亮(まさあき)・ 伝

大阪での少年時代

208

学問と出会いかかって 意気投合-216

212

終戦・敗戦直前 217

意気投合 218

新しい教育・研究の仕事

「厚生問題」改題「社会事業」の復刊 222 221

戦禍なお酷の中、原爆犠牲の長崎へ

日本社会事業専門学校創設へ 占領権力の本質が露骨に----・ーゼネスト中止 223 223

二度と本は売るまい 225

本科始まる 225

権力の本質に抗しつつ

学校の仕事と結婚 レッド・パージの始まりとたたかい

憲法が保障する権利の侵害をテーマに研究論文を発表 229

朝日訴訟へ、たぎりたつもの

231

人権防衛活動の一環として 233 231

この花や やさしけれども

朝日さんのたたかい、始まる頃

かの安保闘争の年、朝日訴訟一審判決-

生活保護行政を「権利保障」にふさわしいものへ

236

埼玉大学、そして脳梗塞を克服して 「金沢と暫しの別れ」(下) 金沢にて(中) 金沢にて(上) 暴力学生による大学占拠への対応、そして金沢へ 同済大学訪問、コスタリカの思い出など 日本福祉大学の時代 九九〇年代-2 金沢へ 城北病院老人問題研究会。高齢者が立ち上がり 地域へ 力あわせて編著『社会保障裁判 当局の広報義務-その一例として、学内学会での報告 日本福祉大学着任に続く五年間 妻・美代子のこと若干 折角の地域・法学部へ来たからには 過労、大雪、忘れがたい住居 歴史とは、反動勢力による襲撃との取り組みの日々 藤井さんへの初めての手紙、そして上告審への意見書 ホームヘルパーが一番喜ばれるのは 書斎等の増築 美代子と金沢平和都市宣言のことなど 米騒動発祥の地を二人で訪れ 別れに先立って 「この国が少しは立体的に」 小川政亮文庫の誕生 埼玉大学へ 加藤訴訟勝訴-元号制の不当性 「われらの明日を!」 小川家のそもそもは鳥羽から 『小川政亮著作集』全八巻 295 -これまた研究者冥利に尽きる 309 -研究者冥利に尽きる判決の一つ「永井訴訟」 295 304 304 315 290 292 288 300 戦後社会保障権運動の発展―』(ミネルヴァ書房) 305 307 310 301 303 314 319 312 297 284 317 284 311

291

生活扶助基準引下げに対し、審査請求一万件超

323

軍隊のないコスタリカ

上海・同済大学法学部を訪問

自伝を終えて 小川政亮・井上英夫・垣内国光

視力低下であらためて思い出す父のこと

324

小川理論の今日的意義を考える

歴史を教えない、学ばない背景を見据える

335

当事者や運動側での学習を広げる 336

権利としての社会保障を考える

小川先生の最近の暮らしはどうですか。

341

資料編

母のことー

344

多摩と浪速の想い出(池口尚夫)

小川恂臧(おがわじゅんぞう)略歴

私がかかわった社会保障裁判

小川政亮(おがわまさあき)略歴

352

349

357

「福祉のひろば」連載時に使用した写真と関連写真

364

父・怕臧